

---

# 奇異怪会 自選集

剣崎輝

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

奇異怪会 自選集

### 【コード】

N7603E

### 【作者名】

剣崎輝

### 【あらすじ】

私が幼い頃から体験してきた事を、少しでも皆さんにお話いたしましょう。

巻 喚び声（前書き）

この短編集は私の体験をベースに読み物として脚色を多少加えてあります。

作中に出て来る登場人物、地域等は全て仮称です。

この短編集はPCとケータイからの見え方が違います。

ケータイ専用の改行を多めに入れてあります。

ケータイで空改行無しで見える場合は縦書きをご利用下さい。

## 壱 喚び声

これはまだ、私が幼少の頃の話。

私の父方の実家は〇市の山奥にある。未だに自然が豊富な場所で、実家の側には川が流れ、夜は虫の声とその沢を流れる溪流の音が煩くて、眠れないほど静かな所だ。

父親の家系はかなり長寿の家系らしく、曾祖母は103歳という長寿で大往生した。

私のアルバムにはその曾祖母に抱かれた三才の七五三の写真がある。

その曾祖母が亡くなり、恐らく三回忌の法要で、その実家に泊まった時だった。

私の寝た部屋は、普段、祖母が寝ている大きな部屋で、私の足の方には、障子で仕切られた仏間があった。

私は祖母と母親と並び、川の字に寝る事になった。

いつも、夜中に目が覚める眠りの浅い子供で、その日もふと、意識が覚醒した。いつもなら、意識が覚醒しても、目を開けるほど、ハッキリと目が覚めるわけじゃない。

だが、その日は違っていた。

よんでる？

誰かに呼ばれている気がしたのだ。だが、まだ、起きる気になれなかった。

アマネ

やっぱり、よんでる……

私はそう思い、目を開け、体を起こした。

私の視界に飛び込んでくるのは、暗い部屋と、障子。だが、障子の向こうが微かに明るい。

あ、ロウソクがついてる。

私はそう思い、嬉しくなった。

私はロウソクの火を見詰めるのが好きな子供だった。ロウソクが燃え尽きるまでジーっと見つめていたらしい。

私は布団から抜け出し、布団の上を四つん這いになり進んでいく。その障子が音も立てずにスーッとゆっくり開く。

私は止まり、その不思議な光景をポケットと見ていた。

私の前方に仏壇が現れる。

あれ？

ロウソクに火が点いていると思っていた私は、小首を傾げた。ロウソクは点いていない。

仏壇の中央で紫色に燃える位牌があるだけだった。

紫色に光ってる……

その紫色の位牌を認識した瞬間、背筋がゾゾッと、粟立った。

アマネ

喉がひゅうつとなる。位牌からその声が聞こえてきていた。

いやだっ！ こわいっ！

だが、声も出せない。

紫色の炎は徐々に大きくなり、渦を巻き始める。

アマネ、こっちや、おいで……

私の体は徐々に仏間に引っ張られて行く。

私は咄嗟に寝転び、布団を掴んだが、布団毎、引っ張られて行く。もちろん、私はジタバタもがいた。

行かない！ そっちに行かない！ 行きたくない！

私は必死に声を上げようと口を開き、息を吐いても声が出ない。喉がひゅうつひゅうつと鳴るだけだった。

幼い身体に乗せた布団は、既に半分、仏間に入っていた。

私は咄嗟に目の前にある障子の棧を掴んだ。

ガタンっ！

物凄い音が立ち、母親と祖母が飛び起きた。

母親は私を見て、首を傾げていた。

「なにやってんだい、アマネ」

私はその声を聞いた途端、大声を張り上げて泣き出した。

「おかあーさあんっ！ おばあーちゃんっ！」

祖母と母親の話だと、その後、私は執拗に障子を閉めるように頼み、祖母の布団に潜り込み、祖母にしがみついて、寝たようだ。

今、思えば、あの声は曾祖母の声だった。生前、曾祖母は私を異様に可愛がったらしい。あまりにも幼過ぎて覚えていない。

だが、その時、曾祖母はまだ、彼岸の人になりきれなかったのかもしれない。もしくは、私を彼岸に連れていこうとしたのかも知れない。

私はしばらく、仏間の障子の前で寝るのを頑なに拒んだという。

## 貳 肝試し

中学一年の晦日の夜。珍しく私は家にいた。

正確にいえば、私達家族は家にいた。小学校の時分から、年末年始はスキー旅行に行っていたのだ。その年は宿が取れなかったのか分からないが、家での正月を迎える事になっていた。

私はその頃から文字書きを趣味としていた。全く小説とは呼べない稚拙な文体で、ほぼ会話文で占めるようなモノをノートに書き綴っていた。

「アマネ、電話！」

階段下から母親の声がし、私はシャープペンシルを置き、階段を駆け降りる。

「誰から？」

「フジノさんからよ」

私は黒電話の側に置いてある受話器を耳に当てる。

「もしもし？」

『あつ、ミナツキさん、明日の夜ヒマ？』

「明日？ 大晦日って事？」

『そう。除夜の鐘撞き行かない？』

「除夜の鐘？」

私は聞き返しながら、台所に立っている母親の顔を見た。

母は私を一瞥し、何か考えているようだった。今思えば、どこまで手綱を緩めていいのか思案していたのだろう。

「ちょっと待って」

私は受話器を押さえ、母親に首を傾げる。

「フジノさんがね、みんなで除夜の鐘撞きに行かないかって誘ってくれたんだけど、行っていい？」

母は私の顔をジッと見詰め、息を吐いた。

「特別だよ」

私はその特別に嬉しくなった。大晦日は夜中まで起きていても怒られない日。夜十時に寝なくてもいい日。さらに今年は、特別に夜中に外出してもいい日になった。

「やった！ あ、フジノさん？ お母さんがいいって」

私はクラスメイトのフジノに了承を伝えた。それから、いろいろと話をしているうちに、自分は出汁に使われているのが分かった。

フジノは付き合っている同級の男の子がいた。

彼と付き合い出して、親はかなり厳しい事をいうようになったとか。ようは除夜の鐘撞きデートに行くために、私や他の子を誘ったのだ。向こうもグループで来るそうだ。

除夜の鐘がある寺院まではかなりの距離があつた。だが、初の除夜の鐘撞きと深夜の外出とあつて、徒歩四十分の道程はさほど遠く感じなかった。

私達、五人は参道の階段を上がり、寺院にお参りをし、除夜の鐘を突く。上手く鳴るかドキドキしたが、私の突いた鐘の音は、大晦日の夜空に鳴り響いた。

いち早く鐘を突き終えたフジノは、彼氏のグループを見つけ、近寄っていく。煩惱を払う為の除夜の鐘なのだが、思春期は煩惱真つ盛りだろう。誰も除夜の鐘撞きの意味など考えもしない。

フジノの彼氏グループは四人。四人のメンバーの顔を見て、私の心臓が少しおかしくなった。私も煩惱まっしぐらだ。

「よう」

その原因マサキが私に軽く手を上げる。

「こんばんは」

私はマサキに素っ気無い返事を返していた。我ながらもう少し笑顔で返事が出来ないモノかと、思った。

「ミナツキはお参りしたの？」

「もう、お参りも鐘撞きも終わってる」

どうも自分の中で言葉がギクシャクしているのが、気に入らない。いつもマサキと話すとおっけんどんになる。

「それより、彼女のサイトウさんはどうしたの？」

マサキが口を軽くへの字にした。

「あいつの家、かなり厳しくてさ。誘ったんだけど断られた」

私は手に持っていた甘酒の湯飲みを見詰めた。

「そう」

「あ、それ、甘酒？」

「あ、うん。この甘酒、ちょっと苦手」

「じゃあもらう」

彼は私の手から湯飲みを取り、湯飲みにも口付けた。

私の頬が熱くなった。暖を取るために焚かれた焚き火の所為だけじゃない。

「ミナツキさん、マサキ」

フジノが私達を呼びながら近寄ってくる。それと同時にマサキは、同じ部活仲間の女の子に手を上げ、話出した。

私は軽く溜め息を吐き、フジノを見た。

「フジノさん、これからどうするの？」

「肝試ししない？」

「肝試し？」

自然と眉間に物凄く皺が刻まれる。

フジキは不思議そうに私を見詰めている。

「ダメかな？」

「ダメってわけじゃないけど……」

フジノの彼氏は苦笑いを浮かべた。

「何も起きないって。裏手の墓地に行くだけだから。怖くないって」

確かに怖い。何が怖いかといえれば、上手く言葉に言い表せない。

強いていうなら、大袈裟かもしれないが、命の保証が全くない怖さかもしれない。

「いいよね、ミナツキさん」

私は頷くしかなかった。ここで嫌だと言えるほど、私は強くない。どうやら私の同意が最後だったらしい。みんな、集まって話出した。

「どうやって行く？」

「ごちゃつと集団で行こうよ」

「ええ。面白くねえよ」

「でも、ペアだと女の子が一人余っちゃうよ」

フジノ以外の女の子達の顔が瞬時に青くなった。

「いやあ！ 一人は絶対にイヤ！ マサキ、一緒に行って！」

部活仲間のスミダさんがマサキの腕を取った。なぜかマサキは私をチラ見してくる。

私はマサキの視線を無視し、フジノ以外の女の子に微笑んだ。

「みんなで一緒に行くなら、私一人でいいよ」

その発言で全員の視線を集めてしまった。

フジノが私に笑い掛ける。

「度胸あるっ」

「別に度胸なんてないよ。ただし、一番後ろがいい」

「そう言って逃げる気だろ？」

マサキが口の端を上げた。

「逃げないよ。後ろに人がいるのが苦手なの」

「ゴルゴ13か、お前は」

マサキの言葉で笑いが起きた。

結局、マサキ・スミダ組が先頭、私は最後一人で歩く事になった。

墓地は寺院の裏山の斜面にあり、やっと二人擦れ違える坂道を登って行かなければならない。外灯はあるが舗装はされていない。鬱蒼とした雑木林を登って行かなければならない。

風で雑木林が揺れる度に女の子の悲鳴が聞こえる。

マサキは時折私を振り返り、私の確認をする。

「逃げないわよ」

「逃げたら承知しなねえからな」

「逃げないから、前向いた、向いた」

私は苦笑いを浮かべながら、手で払う。

それでもマサキは振り返る。私も苦笑いを返し、手で払う。

分かっている。マサキは私が一人だから心配してくれているのだ。

他の男の子達も気にしてくれている。

私は冷えきった手を擦り合わせる。

深夜になって急に冷えてきた。吐く息がかすかに白い。

私の背中がいきなり悪寒を覚えた。まさにゾツという擬音が似合

う寒気。

マサキが振り返る。私は苦笑いを返し、手で払う。

ふと、頭数が気になり、数え出した。

「1、2、3、4、5、6、7、8、9…… うん。ちゃんと九人

いる」

私は安心したように頷いたが、慌てて頭数を数え直した。

「1、2、3、4、5、6、7、8…… 9……」

私はもう一度ゆっくりと数え直した。

「1。2。3。4。5。6。7。8……」

私は唾を飲み込む。

有り得ない。でも、確かにある。

「 9」

そう。私はみんなの後頭部を数えているのだ。

私を入れたら…… 十人……

私の吐く息が雪のように真っ白になった。

マサキの前にいるのは、だれ？

マサキの前に黒い髪の後頭部が見える。

まるで私達を誘導するかのようになり、マサキの前をユラユラ動いている。

私の毛穴という毛穴が粟立った。私の足が自然と止まる。

マサキがまた振り返った。立ち止まる私を不思議そうに見詰めていた。

「ミナヅキ、どうした？」

私は何も言えずに首を横に振る。だから、嫌だったのだ、肝試しなんて。しかも深夜の墓地なんて。

「大丈夫か？」

みんなもその声で私を振り返る。

私は道が続いているはずのマサキの前方を見詰めていた。

外灯は確かに点いている。それなのに、道が見えない。漆黒の闇がそこに存在している。

「み、道が」

私はそれしか言葉に出来なかった。

マサキ達が前を見て、再び私を見た。

「道がどうした？」

マサキの前にいた頭がピタリと止まる。その頭、身体がない。頭しかない。

私は逃げ出したかった。でも、身体がピクリとも動かない。頭の中で警鐘が鳴り響いている。

頭が、ゆっくりと振り返り始めた。

動かせない瞳は、それをただ見詰める事しか出来なかった。

真っ白い面長の顔に二つの空洞、毒々しいほどの真っ赤な口。私は女だと思った。

空洞と目が合う。ゆっくりニンマリと真っ赤な口が裂ける。

「お前、見えるのか」

悲鳴すら上げられなかった。

「ミナヅキ、顔真っ青だぞ！」

漆黒の闇からポと白いモノが複数浮いて出た。

警鐘は最大に鳴り響いている。

声さえ出れば。

私はなぜかそう思っていた。声さえ出れば助かる。

クイッとロングスカート裾が引つ張られた。その途端堰を切ったように、私は有りつ丈の悲鳴を上げていた。

それに連動し女の子達の悲鳴が上がる。前にいた仲間が私の横を擦り抜け、一斉に下り出した。

でも、私は動けない。

頭が物凄い形相をし、私を睨み付け、獣のような雄叫びを上げる。グイッと腕を掴まれた。

「なにしてんだ！」

私はマサキに腕を引かれ、動く事が出来た。でも、後ろから迫ってくる気配は消えない。漆黒の闇が迫ってくる気配。振り返らずにいられない。

私は何度も振り返る。それに釣られてマサキも振り返る。

「なんだよ、なんなんだよ！」

「マサキの前にね、女の人の頭だけが浮いてた」

マサキは表情を強張らせ、引く手が強くなった。

闇の迫るスピードが私達より早い。周りが段々黒くなっていく。

このままだと、私もマサキも漆黒の闇に飲み込まれてしまう。

また、スカートの裾が引かれた。

私の口から悲鳴が上がる。

もう一回スカートの裾が引かれる。

「イヤあつ！」

はつきりと拒絶の叫びが出た途端、一瞬にして辺りが明るくなった。パツと灯が点いたようにだ。

私は仲間の所まで降りて来て、改めて振り返った。

漆黒の闇の中で頭達が咆哮を上げていた。だが、一定のところから降りて来れないようだった。

フジノが溜め息を吐いた。

「怖かったあ」

「マジ、ビビったよ」

みんなの視線が自然と私に集まった。

「ミナツキさん、もしかして見える人？」

男子の一人が口を開いた。

私は首を振った。

「分からない。でも、スカートの裾を引っ張られた」

マサキは私を見詰めている。マサキには分からないだろう。なぜ見えた事を口にしないのか。

ここでは口にしたくない。してはいけない気がしたのだ。

数年後、マサキに聞かれた。

「　　なんであの時、見えた事口にしなかつたんだ？」

大人になつた私達が偶然街中で再会し、思い出話に花を咲かせていた時だ。

「あの時、見えたつて口にしたら、せつかく張ってもらつた結界が破れちゃうからよ」

マサキは不思議そうに私を見詰めていた。

「結界……　　やっぱりそういう力があるのか？」

私はマサキに微笑んだ。

「見えない人、感じない人よりはね。　　ただそれだけよ」

参 Black Mask

この話の真相は、まだ誰にも話した事がない。

物心付いた頃から見てきている、今現在も時折現れるモノがある。はつきり言つて、ソレは二度と見たくない。ソレを見ると暗澹あんたんな気分と謂いわれのない罪悪感に苛なまれる。

もし、この先、現れても誰にも真相は話さないだろう。

どうにか出来るのなら、話すのだろうが、抜き差しならない際のモノだから、どう足掻こうと変える事が出来ない。

幼い頃はソレが何であるか全く理解出来ずに、ただ、恐怖心と言い表す事の出来ない漠然とした不安感に苛なまされていた。

ソレの意味に初めて気がついたのは、今も尚、人気のあるF1レーサーの死だった。

『音速の貴公子』と呼ばれた彼は、再三、彼が危ないと言つていたレース場のカーブで事故を起こし、帰らぬ人となった。

その頃、モータースポーツがそこそこ好きで、各モータースポーツにお気に入りが一人必ずついた。

彼はF1の中でお気に入りだった。

いつものように、昼過ぎまで寝ていた私は、遅い昼食を食べながら、事故のニュースを見た。

「セナが……」

私は呆然とテレビの画面を見つめていた。

私の中には、薄気味悪い感触のある感想と、信じたくない気持ちが渦巻いていた。

彼の走りを生で見たくて、その年の日本GPのチケットを取ろうと、お金を貯め始めた矢先だった。

画面はクラッシュ直後の映像が流れている。

原形を止どめていない車体から、彼が引き摺り出され、へりで搬送されて行く。

彼の体から生気が感じられない。私の目には、もう物体としてしか映っていないかった。

「あーあ。神様が連れていっちゃった」

私の口からそう言葉が零れ落ちた。

私は思春期の頃から、異才を放ち、若くして亡くなる人間は、皆神に招集されたんだと思っている。

それがヤハウエイなのかアツラーなのか、ブラフマンなのか八百万の神々なのかは、考えた事もないが、『神に招集』だと感じてやまないのだ。だから、彼もそうだと、未だに思っている。

すでに魂が、霊体、識体が、招集されてしまった体は、物体ではない。私の経験上、再び物体が人間の体に戻り、意識を取り戻すという事はない。

彼もそうだった。二度とハンドルを自らの意思で握る事はなかった。

彼の死後、その当時、私の家に居候をしていた親友のマリが、タブロイド誌を持ってきた。

彼女のバイト先で、私のバイト先のキャバクラの更衣室があるカラオケボックスの裏で、仕事前の一服をしていたところだった。

「マリ、マツチャンでもフォーカスされてたの？」

私は煙草を燻ゆらせながら、彼女に笑い掛けた。

マツチャンとは、彼女の大好きなミュージシャンのニックネームだ。

「違っつて。セナの事故直前の写真が載ってたから、買ったんだよ。彼女はそう言っつて、そのページを開いて見せてくれた。」

「あー」

ソレが写っていた。

「どうしたの？」

私は彼女の問い掛けに少し頷いた。

「うん…… この写真、顔が真つ黒なの」

彼女は首を傾げて、シートに座るヘルメット姿の彼の顔写真を見た。  
た。

「真つ黒？ 良く撮れてるじゃない。臨場感が伝わってくるいい写真だけど」

彼女はそう言って、再び私を見た。私を見た瞬間、少しだけ顔が強張った。

「それって、私には見えないモノなんだね」

「うん。小さい頃からたまに見ていたんだけど……」

私は再び彼の顔写真を見た。

ヘルメットやヘルメットの下に被るサポーターははっきりと模様やロゴまで見えるのに、彼の顔だけが真つ黒くなっている。まるで、そこだけが暗転しているかのように、黒塗りの彼の顔がある。

彼はこの直後、帰らぬ人となった。

「私が見つかったってどうしようもないのに。いまさら、分かったってどうしようもないのに」

「なにが？」

「彼の死…… 私には彼が見えない。真つ黒で彼が見えない。小さい頃から、たまに見てたの。首から上が見えない人を…… でも、それがなんだか分からなかった…… きっと、死影なんだよ」

彼女はセナの写真にもう一度視線を落とした。

「決まってたって事？」

「分からない。その写真で初めて意味が分かったから。あつ、もうそろそろ、着替えないとヤバイ」

「アマネからユウカに早変わり？ 笑顔を貼り付けて降りてくるのだけはやめてね、怖いから」

彼女はそう軽口を言って口の端を上げた。

「そんなのわかんないよ。嫌な客が付かない事、祈っててよ」

私はそう笑顔で返し、更衣室に入った。

それから有名人の死を知る度に、私は直前の写真や映像を探して見るようになった。あの黒い顔、死影を確認するためだ。でも、直前と言っても、日数的にバラバラで、写っている方が圧倒的に少なかつた。

数年後、また、私の好きな人が急死した。

彼は急性前骨髄性白血病と闘い、勝つ事が出来なかつたK1ファイター。

彼の死が私にある種の諦めあきらめを突き付けた。

アイルトン・セナのように、死を先に知つたわけじゃなく、アンディ・フグの場合は、死影が先だつた。

彼の結果的に最後となつたテレビ出演を見ていて、ある瞬間から彼の凜々しい顔、優しい笑顔が見えなくなつた。

彼の顔が一瞬にして、真っ黒になつたのだ。

言い知れぬ不安に駆られるが、誰にも言えなかつた。

「フグが死んじゃうかもしれない」

そんな事を口に出したら、大笑いされるか、物凄く眉間に皺を寄せられるかのどちらかなのは、明白だからだ。

でも、私を理解してくれているマリともう一人の親友のリカには、言つてみた。やはり、案の定、大笑いをされた。

だが、しばらくして、フグ緊急入院のニュースが世間を騒がせた。大笑いをしていた二人から、相次いで携帯電話にメールが届いた。二人とも言葉少なく「フグ、入院しちゃったね……」みたいなニュアンスのメールだつた。『……』に含まれている言い現せない不安感は、私も同じだつた。

私は彼から死影が消え、再びK1のリングで彼の華麗な決め技を見れる日が来るのを、祈り続けた。

そんな中、病床のフグからのメッセージが印象的だった。彼は病魔になんか負けるものか、勝って再びK1のリングに立つと、言ってくれた。

本当に彼は最後までファイターだった。病魔に何度も踵落としを仕掛けただろう。だが、病魔は彼の体を急速に蝕み、彼を神の膝元に導いて行った。

彼の死を聞いた時、私は悟った。

あれは忍び寄る死影ではなく、死の黒い仮面だと。被ってしまった黒い仮面から逃れる事は出来ない。

悲しかった。悔しかった。

こんな力が有ったって、あんな黒い仮面が見れたって、私には何も出来ない。

不甲斐なくて、いたたまれなくて、でも、何も出来ない自分。ただ、黒い仮面を見て、罪悪感に苛まれるさいなだけ。

あれから、何度も黒い仮面を見てきた。

私の生活空間が変わろうと、年を重ねても、黒い仮面が現れる。

その度に人の死を考えてしまう。

私の、このいらぬ能力の意味を考えてしまう。意味なんてあるのだろうか。

最近も黒い仮面に遭った。

2006年の初め、リカの伯母で同じ屋根の下で暮らしていた老女が亡くなった。

少し健忘症気味で足腰は弱っていたが、毎日化粧をし、いつも身綺麗にし、自分の事は自分でできていた彼女。

私は年末の買い物をしていくついでに、彼女のご用伺いもしようと思い、彼女の部屋を訪れた。

「小母さん。買い物行くけど……」

ベッドメイクがキッチンとされたベッドに、彼女の首から下が座っていた。

「買い物？」

「うっ、うん」

黒い仮面の向こうから、彼女の声がする。

「そうねえ…… 特にないかしらねえ」

「お正月はスーパ―休みだけど、大丈夫？」

「大丈夫よ。アマネちゃん、お金が足らなかつたら、言ってね」

多分、彼女はそう言って私に微笑み掛けたと思う。

見えてない私は、彼女の瞳があると思いき箇所視線を合わせ、笑り返した。

「ありがとうございます。じゃあ、買い物行ってきます」

「行ってらっしゃい」

私は静かにドアを閉めた。

私と彼女の会話はそれが最後だった。

初めて、黒い仮面の人間と会話を交わした。初めて、身近な人間が黒い仮面になった。

不謹慎だが、この時、少しだけ、黒い仮面を見れる事にプラスの思考が働いた。

受け入れる心の準備が出来ると、その場面が来ても取り乱すことはないなど。

だが、リカには言えなかった。リカは私の知らないこの能力を、理解してくれる数少ない人間の一人だ。だが、理解と感情とは、全く別物だ。特に身内の外れることのない死の予告など、誰が耳を貸

すだろう。耳を塞ぎたくなるような雑言でしかない。喩えそれが真実だとしてもだ。だから、黙っていた。後から言っても、今度は詰なられるだろう。

私は弱い人間だと思う。バカにされても、リカを傷付けても言うべき事だったのかもしれない。

その年最後の仕事から帰ってきて笑顔で話をするリカに、普通を装い、一年間の仕事の労おをひしか出来なかった。

## 五日後

リカの伯母は、天寿を全うした

## 肆 送り火

私はその日、親友のリカとマリの二人と共に、リカの家の近くにある海水浴場に遊びに来ていた。

その頃はまだ、海水浴場があるこの町を、私は住処としておらず、マリと共に泊まりに来ていたのだ。

リカの家は海水浴場へゆっくり歩いても十分足らずの好条件。

私達はサマーベッドを借り、のんびり休暇を楽しんでいた。

「リカは相変わらず犬だよねえ」

マリは煙草に火を点けながら、波打ち際で燥いでいるリカを見た。  
「子犬だからね、リカは」

リカは私達の視線に気が付き、千切れんばかりに尾を振って走ってくる子犬のように、戻ってきた。

「早く海に入ろうよ！」

私も煙草を取り出し、リカに微笑んだ。

「これ吸ったらね」

リカはバスタオルを手にし、私の足下に腰掛けた。

「もう。ホント二人ともお尻から根っこが生えちゃうんだから」

私は海水浴客で芋洗い状態の海を見詰めた。

「今日は比較的空いているほうだね」

「平日だからね。それにここはあんまり余所の人来ないからさ」

リカはスポーツドリンクを口にする。

「海水浴区域が狭いしね」

「そうそう。あんなにポート区域を取らなくたっていいのにね」  
マリは大きく頷いていた。

「ああ、あれは離岸流が多発する区域だからだよ」

私がそういうと、マリとリカは目を丸くした。

「なんでそんな事知ってんの？」

「え？ ウチのデストラーデがライフセーバーだから」

デストラーデとは私の弟の渾名だ。昔西武ライオンズにいた助っ人外国人選手に似ているのだ。

「離岸流は海水浴客には危険だけど、ボート区域には持ってこいなんだって。たぶん、ここだと左側が向岸流で右側が離岸流だよ」

私が指を差すとちょうどレスキューボートが一台出るところだった。黄色と赤のビキニパンツを履いたマツチヨなお兄さんがボートを軽く押し出すと、スーツとボートが動き出す。お兄さんはそのボートに簡単に正座し、手で一掻き二掻きすると、あっという間に沖に出て行った。

「早あ！」

リカとマリは驚いていた。

「離岸流って早い所だと秒速一メートルくらい余裕なんだって」「秒速っ！ って事は十秒で十メートルでしょ！」

地元民のリカもさすがに驚いていた。

「だね。だから、怖いんだよ。気が付いたら沖に流されている海難事故が起きるから」

「沖に流れて行くビーチボールとか追い掛けちゃダメってそれなのか」

マリは頷いている。

「あれは風じゃなく離岸流に持っていかれるから、無理に追い掛けると、自分も持っていかれちゃうんだよ」

リカはいきなり眉尻と口許を下げた。

「離岸流…… 怖いね」

「海だけじゃなく自然って怖いモノだよ。離岸流に乗っちゃったと思ったら、岸と水平に泳ぐと脱出出来るよ。で、戻れないくらい沖に流されてたら、岸に向かって大きく手を振る。振れるんだったら、両手で大きくね。そうするとああやって助けに来てくれる」

私はボート区域に戻ってきたレスキューボートを見た。若い男がライフセーバーに頭を下げていた。

リカとマリはその光景を黙って見詰めていた。

私はステンレス製の携帯灰皿で煙草を揉消した。

「さてと。気をつけて遊ぼうか」

マリとリカは大きく頷き、私達はビーチマットを持って海に駆け出した。

三人でビーチマットに掴まりながら、まさに海水浴を楽しんでいた。

背の高いマリとリカはまだ足が届いているようだが、すでに私はクラゲの如くフヨフヨと海水に浮んでいる状態だった。

「少し深いところに行こうよ。遊泳区域ブイの所まで行こうよ」

好奇心旺盛のリカは目を輝かせて、私達を見ている。

私はマリを見た。マリは軽く溜め息を吐き、リカに頷く。

「まあ、ビーチマットがあるからいいか」

私達はビーチマットの浮力を借りながら、ブイ辺りまで足を延ばした。さすがにここまで来ると、周りにいる海水浴客は少ない。

「ブイを越えないで下さいねえ」

水上監視のライフセーバーに声を掛けられる。

三人は手を上げ、声を揃えて返事をする。大の大人が小学生のように返事をするのも、レジャー感が一役買っているからだろう。

私達はブイのロープ伝いに移動したりしながら、しばらく遊んでいた。

「ひゃ！」

マリが突然声を上げた。

「なに！」

リカが驚いたように、マリを見る。

「いや、急に海水が冷たくなったから」

「ええ。冷たくないよ」

リカがマリの側に寄っていくと、目が輝いた。

「うわ、ホントだ！ 足のところ、冷たい」

「海流が変わったのかもね」

私は二人に笑い掛けた瞬間、背筋がゾクツとする。

「うわ……マジで冷たい」

「でしょ？」

マリが私に得意げに笑い掛けた。

私の背中はゾクゾクしたままだ。普通なら足が温度になれ、寒気は消える。

この海流、ヤバいかも。

私は二人に悟られないように微笑んだ。

「休憩しない？」

二人は素直に頷き、ビーチマットに戻ってきた。私達は他愛のない話をしながら、海岸にビーチマットを押しに行く。

どうも、足に纏わりつく感じがする。強いて言うなら足に視線を感じる。海の底から。

「アマネ。顔色悪いよ」

「うん」

マリとリカはそれだけで最近は分かるようになっていた。マリとリカの顔色も悪くなる。二人のバタ足が強くなる。

リカとマリは海岸に慌てて上がり、サマーベッドに我先にと座った。

「やめてよね」

ビーチマットを手へのんびり戻った私を、リカは口を尖らせ、軽く睨んだ。

「やめてって言われても、私も困るし」

私は苦笑いしか返せなかった。

マリは肩を竦ませ、クラーボックスからスポーツドリンクを取り出す。

「まあ、アマネに当たってもしょうがないじゃない」

「そうだけどさ。まあ、それがなかったら……」

リカはその後を想像したのだから。慌てて首を振った。

「もう！　せつかく遊びに来てるのに！」

「想像するリカが悪い」

マリは苦笑いを浮かべていた。

私達は結局早めに切上げ、リカの家に戻った。

キヤミソールとバミューダパンツで寛ぐ私の肩を見て、マリもリカも笑い出した。

「な、なによ」

「すげえ、肩、真っ赤！」

「日焼け止めバッチリ塗ったのになあ。でも、マリもリカも真っ赤じゃない」

互いの肩を見せ合い、日焼具合を比べる。三人とも本当に真っ赤だった。

夕飯のテーブルでリカが嬉しそうに私達を見る。

「この後さ、花火しに海岸行こうよ！」

異存はないので、私とマリは頷いた。

花火をコンビニで買い、海岸に行くと、結構花火をしている人達が多かった。

私達もさっそく花火を始める。私は派手な手持ち花火をやるのが、あまり好きではない。はつきり言う怖いのだ。派手な花火に凶暴性を感じてしまうのだ。だから、同じ花火でも、チラチラと弾ける地味な花火の方が好きだ。

リカとマリに派手な花火を任せ、私はチリチリと弾ける線香花火をしていた。

消火は海。波打ち際で消火する。  
線香花火の完全消火に行った私の足に、パシャッと穏やかな波が掛かった。

私は立ち上がり、夜の海を見詰める。満月に近い月が海を照らしている。海上に光の道が出来ている。凧ぎの海は深い紺色で夜空と同化している。

まだ、渡れない。

私の脳裏にそんな言葉が浮んできた。

でも…… 行かなきゃいけない気がする。

「綺麗だねえ」

リカの声で身を竦ませた。

「うわ！ びっくりしたあ」

「なに、ボケーンツとしてるの？」

私はリカに苦笑いを返す。

「怖いくらいに綺麗だったから、見惚れてた」

「分かる分かる。吸い込まれそうだもんねえ」

リカは月と海を見て頷き、踵きびすを返した。私も慌ててリカの後を追う。

見惚れていたなんて嘘だ。どちらかと言ったら引き込まれそうだった。あの光の道に。あのまま、リカが来なかつたら、あの思いが強くなっていたはずだ。

マリが私達に笑い掛ける。

「随分と綺麗に月の道が出来てるね」

「海が静かだからね」

リカは打ち上げ花火を取り出しながら、マリに返す。

「何処だったか忘れたけど、月の道は月に歩いて行ける道って話があったよね」

「聞いた事ある。昔の人はロマンチックだよ」

私は二人に苦笑いを浮かべた。

「あだし、あの道は冥界に続く道だって読んだ覚えがある。あれは死者の道だって」

「それも聞いた事ある。でも、それもロマンチックだよ」

マリは打ち上がる花火を見ながら呟いた。

月光の道を歩き冥界に逝く。確かにその話を一番最初に思い描いた過去の誰かは、ロマンチストだったかもしれない。だが、月はロマンの中に狂気を含む衛星だ。そして、水の惑星である地球は、月とはきつても切れない縁がある。

行かなきゃいけない。

あの思いは今全くない。なぜ、そう思ったのか。月の道に魅せられた。月に行くのか、冥界に逝くのか。

私は黙って打ち上げ花火を見詰めていた。

私達は全ての花火を終え、冷たい飲み物を買ったためにコンビニに寄った。

私は喉の渇きを早く潤したく、店内で涼んでいる二人を横目に外に出た。

冷たいミルクティーを喉に流し込む。身体がまだ太陽に当たっているかの如く、火照っている。シャワーを借りた時、かなり痛かった。

「水膨れにならなきゃ、いいけど」

そう独言ちり、肩にミルクティーを当てる。ひんやりとして、気持ちがいい。

「うわ、蒸し暑い」

マリがそういいながら、店内から出てきた。

「リカは？」

「今会計してるところ。なに、肩に」

マリは私の肩を見て、言葉を止めた。

「肩が火照っててさ」

マリは私の肩のミルクティーをどけ、顔が真っ青になった。

「お待たせえ！ん？マリ、どうしたの？」

「アマネの肩」

リカは私の肩を見た途端、日に焼けた赤い顔が、真っ青を通り越して真っ白になった。

「イヤあつ！」

「なに、どうしたの？」

「アマネ、肩、肩っ！」

私は首を捻りながら、自分の肩を見た。

「ぬあ！」

私は驚きのあまり変な声を上げた。

「昼間、真っ赤だったよね！」

リカがマリに確認をしている。

「ただ真っ赤だった」

私はリカとマリを見た。

「何日…… 今日、何日っ！」

「え？ 八月十六日だけど」

マリは不思議そうに私を見詰めた。

私は全て合点がいった。

海の底の視線も、月に魅せられた事も、行き先も。

「送り日だ」

私は昼間見た時には無かったはずの、大小様々な真っ白い手形をジッと見詰めた。

「それって連れて逝かれそうだったって事？」

私はリカに頷いた。

「たぶん。さつき、リカが声掛けてくれなかったら、ヤバかった」  
マリとリカはますます顔が白くなった。

リカの家に帰り確認したところ、白い手形は肩だけではなく、日焼けした背中にも付いていた。

リカもマリも白い手形を黙って見詰めていた。

一年くらい、その手形は消えなかった。

それ以降、八月十六日の海には、絶対に近付かない。

## 肆 送り火（後書き）

後書きまでお読みいただき、ありがとうございます。

さて、この短編集、いかがでしたでしょうか？

数ある体験の中から、百物語に合うようなモノを四編ほど自選してみました。

基本体験談なので、変わっているところは、名称と会話詳細くらいですかね。

各短編の裏話など……

き 喚び声

この話が一番初めに体験した私の原点とも言うべき出来事です。ここから傍迷惑な能力というか勘というか、まあ、それが開花しているつちやうわけですが……

ホント、いらぬいよお！ 私はマジで怖がりなんだよお！

式 肝試し

若い頃って、本当に無謀だなと、思う出来事でした。

今は、肝試しなんぞいきません。私を誘ってくるヤツなんて、知人にはいません。

この頃はまだまだ発展途上といった感じでしょうか、どれをとって

参 black mask

これは……

何も言えませんが、今後口にしたり文にしたりする事はないでしょう。

黒仮面の他にも予見にも似た夢を見ます。

はつきり言って嫌です。大切な人間達に現れたら…… と、考えただけで、暗澹としてきます。

いつか、自分の死期も見える時が来るのでしょうか。マジでこんな能力いらないと今でも思います。

肆 送り火

皆さん、八月十六日の海山は気を付けましょうね。

後日談。

親友のマリの実家に遊びに行った時、マリは大ボケをかましてくれました。

事もあるうに八月十六日に海水浴を誘って来やがった！ まあ、マリも失念していたようですが。日にちを言うと真っ青になったので。

えーっと……

この手のネタは尽きませんが、この手の相談は乗れませんのであしからず。

あと、悪戯に肝試しをするのはマジでやめましょう。肝を潰したいのであれば、映画や漫画、絶叫マシン、最新のお化け屋敷で……  
まあ、最新のお化け屋敷でもこの手の話は尽きませんが……

最後に。

この手の話を書いたり読んだり聞いたり話したりすると、寄ってくるそうですよ、彼岸の方々は。  
あなたの後ろにいたりして……

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7603e/>

---

奇異怪会 自選集

2009年6月7日07時17分発行